

# クロゲハナアザミウマの 有害動植物リスク分析

平成 24 年 2 月

横浜植物防疫所

## 第1章 ステージ1：クロゲハナアザミウマに関する有害動植物リスク分析の開始

### 1 - 1 開始：(開始するに至った問題の本質、目的)

クロゲハナアザミウマは現在検疫有害動植物として取り扱われているが、検疫有害動植物については、平成16年5月21日に公表された「植物検疫に関する研究会報告書」で「検疫有害動植物については、輸入植物の用途や輸送形態も考慮し、可能な限りリスクの定量的な評価を含めて、適時適切なPRA（有害動植物リスク分析）を実施し、それぞれのリスクに応じた措置となるよう検証し、対応していくことが適当。」とされた。

このため、クロゲハナアザミウマの有害動植物リスク分析を見直すこととした。

### 1 - 2 有害動植物リスク分析地域の特定

日本全域と特定する。

### 1 - 3 対象となる経路及び潜在的検疫有害動植物

#### 1 - 3 - 1 経路

クロゲハナアザミウマが発生する地域から輸入される寄主植物を経路と特定する。

#### 1 - 3 - 2 潜在的検疫有害動植物

クロゲハナアザミウマ（学名：*Thrips nigropilosus* Uzel）を潜在的検疫有害動植物と特定する。

### 1 - 4 情報

生物学的な情報は、別紙のとおり。

### 1 - 5 開始の結論

検疫有害動植物の取り扱いについては、「植物検疫に関する研究会報告書」において、付着する植物の用途や輸送形態を考慮しつつ、随時適切な有害動植物リスク分析を実施する旨の指摘があったことから、有害動植物リスク分析を実施する必要性が生じた。

本種を潜在的検疫有害動植物と特定し、また、本種の発生国の寄主植物を経路と特定し、我が国全域を対象として、植物検疫措置に関する国際基準 No. 11「検疫有害動植物のための有害動植物リスク分析」に基づき、有害動植物リスク分析を開始する。

## 第2章 ステージ2：有害動植物リスク評価

### 2 - 1 植物検疫上の取り扱いに影響するクロゲハナアザミウマの特性等

#### 2 - 1 - 1 系統

植物検疫上考慮すべき系統に関する情報は見つからなかった。

#### 2 - 1 - 2 未発生有害動植物のベクター

日本未発生の有害動植物のベクターとなることに関する情報は見つからなかった。

#### 2 - 1 - 3 日本での分布状況及び公的防除の有無

クロゲハナアザミウマは、北海道、本州、四国、九州及び沖縄に分布している。本種は、公的防除の対象ではない。

#### 2 - 1 の結論

クロゲハナアザミウマは、北海道、本州、四国、九州及び沖縄に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報は無い。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。よって、有害動植物リスク分析は中止する。

別紙

和名	名: クロゲハナアザミウマ <sup>3), 5), 7), 8)</sup>
学名	名: <i>Thrips nigropilosus</i> Uzel <sup>1), 3), 5), 7), 8)</sup>
英名	名: chrysanthemum thrips <sup>1), 5)</sup>
分類	類: アザミウマ目 (Thysanoptera) <sup>1), 5), 7), 8)</sup> アザミウマ科 (Thripidae) <sup>1), 3), 5), 7), 8)</sup>

分布: (日本) 北海道、本州、四国、九州、沖縄<sup>1), 3), 4), 7), 8)</sup>  
(世界) 朝鮮半島、トルコ、ウクライナ、オランダ、チェコ、ドイツ、ノルウェイ、フランス、英国等のヨーロッパ州、エジプト、エチオピア、ケニア、タンザニア、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイ、フィジー<sup>1), 3), 7), 8)</sup>

寄主植物: タチアオイ、アマ、オーツムギ、コムギ、グロキシニア、ウリ類、ヘラオオバコ、*Plantago maritima*、トルコギキョウ、アザミ、キク、コスモス、タンポポ、ヒマワリ、ヨモギ、レタス、キツネノボタン、バーベナ、モウズイカ属植物、ペゴニア類、バラ、ラン類<sup>1), 5), 7), 8)</sup>

形態・生態: 雌成虫(長翅型)は、体長1.2~1.3 mm。体色は黄色、しばしば胸部に褐色斑がある。短翅型は、長翅型に比べて全体的に暗色傾向。雄成虫は、体長0.9~1.0 mm。体色は一様に黄色。越冬は、成虫で行い、年間数世代を繰り返す。蛹化は普通、植物下の土中で行われる。<sup>7), 8)</sup>

被害: 成・幼虫共に花及び葉を食害する。キクへの加害は4~6月の生育初期に多く、葉が縮れや小白斑から褐変を生じて生育が悪くなる。施設栽培では、冬季にも発生する。ただし、キクには他種類のアザミウマが寄生するので、被害は混合的に現れる場合も多い。<sup>7), 8)</sup>

ベクター

・ 系統: 植物検疫上考慮すべき系統等が存在するとの記述はなく、日本未発生 of 有害動植物のベクターとなる旨の記述もない。<sup>1), 2)</sup>

防除法: 花き・観葉植物、野菜類等においてアザミウマ類に対する登録農薬がある。<sup>6)</sup>

文献: 1) CAB International (2011) Crop Protection Compendium. CABI (<http://www.cabi.org/cpc/>)  
2) CAB International (2011) Plant Protection Database (1972-2011/10). Silver Platter International N. V. (<http://ovidsp.ovid.com/>)  
3) 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室 編 (1999) 日本産昆虫目録データベース. 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室. (<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/mokuroku/index-j.html>)  
4) 中尾史郎・筒井貴子 (2004) 奄美大島と沖縄本島のクロゲハナアザミウマの雌における生殖休眠と翅型の独立. 日本応用動物昆虫学会大会講演要旨 48.  
5) 日本応用動物昆虫学会 編 (2006) 農林有害動物・昆虫名鑑 増補改訂版. 日本応用動物昆虫学会、東京: 387pp.  
6) 独立行政法人農林水産消費安全技術センター (2011) 農薬登録情報検索システム (<http://www.acis.famic.go.jp/>)  
7) 梅谷献二・工藤巖・宮崎昌久 編 (1988) 農作物のアザミウマ 分類から防除まで 全国農村教育協会、東京: 422pp.  
8) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典. 全国農村教育協会、東京: 1203pp.